

月がつなぐ心

遺愛女子高等学校 二年 近藤 彩乃

「今日は月がきれいだね」

ふと送られてきたメッセージ。このひとことが、なぜか私の心にずっと残っている。特別な言葉でもなんでもないのに、どうして忘れられないのだろう。

私は高校生になってから寮生活をしている。これまでずっとそばで支えてくれていた家族と離れての暮らし。毎朝ひとりで起き、自分で洗濯をする。慣れないことばかりで、毎日が小さな挑戦の連続だった。はじめは大変で、心細かった。

高校一年生だった頃のある日の帰り道。新しい生活の疲れに加えて、テストや部活、学校祭の準備など、さまざまな行事が重なって押し寄せてきた。心も体もどんよりと重く、足取りも自然と重くなる。ふと空を見上げると、きらきらと輝くまるい月が浮かんでいた。「今日の月、いつもよりきれいだな。満月かな……」そんなことを思いながら歩いた。もしも帰る先が家だったら、玄関を開けて母に抱きつき、妹とたくさん話して、安心して過ごせただろう。けれど寮ではそうはいかない。静かに廊下を歩き、自分の部屋に戻るだけ。そんな思いを抱えながら、月の光を見つめていた。

寮に帰り、何気なくスマホを見ると、母からメッセージが届いていた。

「おかえり！今日は月がきれいだね」

その瞬間、胸の奥の重さがふっと軽くなった。離れた場所にいる母と、同じ月を見ていたのだと思うと、気持ちを通じ合ったようで温かくなった。月はたったひとつ。遠く離れていても、私と家族は同じ空の下で同じ月を見ている。私はひとりじゃない。見えないところでも、家族はずっと見守ってくれている。その日から、月は私と家族をつなぐ、心強い特別な存在になった。月のおかげで前に進む力をもらえた。心細くてつらい日も、空を見上げれば、月を通して家族と心を通わせることができた。

月が私の勇気の光となったのは、その時だけではない。以前、二日ほど停電が続いたことがあった。家族全員で過ごしていたあの日、突然家じゅうの電気が消えた。街じゅうの明かりも消えた。冷蔵庫の音も止まり、にぎやかなテレビもあの日はしゃべることがなかった。日常の当たり前が奪われ、不安と不便さに包まれた。そんな中、夜に私たちは外に出て、光のない真っ暗な世界へ飛び込んだ。けれど、その先に

一筋私たちをさす光があった。そこには雲一つない空に、くっきりと輝く月があった。家族みんなでその光を見つめる時間は、不思議と安心感を与えてくれた。つらくても、月明かりの下では心がひとつになり、前に進む力をもらえたように感じた。

ふと思い返すと、幼い頃から、月はいつも私のそばにあった。母と手をつなぎながら見上げたまんまるの月。十五夜に家族ですすきを飾り、団子を並べ、月光に包まれながら過ごした静かなひととき。友達と一緒にキャンプをした夜、満天の星空の中でひときわ語りかけてくる光。少年団の帰り道、車の窓に映る海面のきらめき。ちょっと早起きした朝、窓からのぞいた淡い月明かり。私は、そんな月を追いかけるのが好きだった。月の存在は、幼い頃から私に安心感をくれていた。うまくいかなかった日も、不安な夜も、月を見上げれば心が落ちつき、また明日を迎えられる気がした。今もその気持ちは変わらない。どこにいても、月は必ずそこにある。私を見守る光として、そっと背中を押してくれる。

そんな私も、もう高校二年生。寮での生活にはすっかり慣れた。時間があればみんなで購入物に行き、ご飯を食べに出かける。気づけば寮に帰る頃には真っ暗で、いつも門限ぎりぎり。それでも、夜ならではのすっとした涼しさの中、笑い声を響かせながら、たわいもない話を続ける。最後に広い夜空を見上げ、星を眺め、月明かりを浴びる。やわらかい光が、みんなの心をひとつにするようだ。これが私たちのルーティン。そんな時間を重ねるたびに、絆は深まっていく。

それでも、家族の存在はいつも心の奥にある。心細くなる夜も、逃げたくなる瞬間もある。家族にすぐ助けを求められないもどかしさも感じる。だけど、家族が私を見守ってくれている——そう信じて、月から勇気をもらい、未来へ向かって歩き出す。いつか大学生になり、就職する時が来る。きっと思うようにいくことばかりではない。悩み、挫折しながらも、少しずつ自分の描く将来へ近づいていくだろう。そんな時は、ふと足を止めて夜空を見上げよう。そこには、静かに輝く月がある。月が私を見ている。家族が私を見守ってくれている。遠く離れていても、心はつながっている。

今日もまた、空を見上げる。勇気をくれる魔法の存在。私にとっては特別な言葉。

「今日は月がきれいだね」